
短編集というか残念集

もり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集というか残念集

【Nコード】

N4228V

【作者名】

もり

【あらすじ】

ファンタジーや恋愛などなど、色々残念な短編が書き上がりましたら更新していく予定です。

かなーり、不定期更新になると思います。

妄想部的*千一夜物語*（前書き）

本日更新の妄想部8月企画『童話』のボツになったお話です。
ネタに悩んでる時に、おの様と話してて思い付いた話なので、影響
されてます。そして、千一夜は童話じゃないじゃんという自分突っ
込みでボツに致しました。

妄想部的*千一夜物語*

むかしむかし、ある所のおじいさんはマサカリ担いで山へ柴刈りに、おばあさんは鶴が織った反物で出来た羽衣の洗濯にいきました。

おじいさんは通りがかった竹藪の中で、一本の光輝く竹を見つけました。

そして、おじいさんがその竹を恐る恐る叩き切つてみると、竹の中から光輝くかわいい親指ほどの大きさの女の子が出てきました。おじいさんは、女の子を『おやゆび姫』と名付けて家へ連れて帰る事にしました。

一方、おばあさんが川で洗濯をしていると、上流からどんぶらく、どんぶらくと桃が流れて来ているのを見つけました。

おばあさんがその場で食べようと素手で割った桃の中からは一寸ほどの大きさの凜々しい男の子が出てきました。

おばあさんは男の子を『一寸法師』と名付けて家へ連れて帰る事にしました。

そうして『おやゆび姫』と『一寸法師』は一目会ったその日から恋の花咲くこともあったようで、結婚して未長く幸せに暮らしました。

めでたし、めでたし。

* * *

「あのな……」

「なんですか？」

「今の話はおかしいだろ？」

「どこがですか？」

「どう考えても色々おかしいだろ？」

「そうですか？」

「ああ。……そもそも、お前は恐くないのか？」

「何がですか？」

「俺は世間では残虐王と呼ばれている。毎夜、無理に召し上げて夜伽をさせた娘を殺す恐ろしい王だとな」

「それが？」

「え？ いや……まあ、いいが。それにしても、この場合にお前が話す物語っていうのは相場が決まってるだろ？ アリババやシンドバッドやアラジンなんかじゃないのか？ なんて色々ミックスされた日本昔話なんだ？ しかも一つだけアンデルセンが混じってたよな？」

「……ツチ！」

「お前今、『ツチ！』って言ったか？ 舌打ちしたよな？ 普通、王様に向かって舌打ちするか？」

「王様……では、明日の夜も新しいお話を致します」

「無視かよ……まあ、明日はちゃんと一つの物語をすると約束するなら今日はもういいぞ」

「……かしこまりました。それではお休みなさいませ」

「ああ……」

「キジも鳴かずば撃たれまい」

めでたし、めでたし。

* * *

「どこが？」

「なんですか？」

「今のは物語じゃなくて、ことわざだよな？百歩譲って題名だ。しかも『めでたし、めでたし』じゃないだろ？」

「そうですか？」

「間違いなく、そうだ。そもそも物語ってものには起承転結があるだろうが」

「じゃあ、私にどうしろって言うんですか！？」

「逆切れかよ……とにかく、普通の物語を話せ。今のことわざの由来でいい」

「由来ってどんな？」

「ん？ええと、確か……むかしむかし、あるところに女の子がいました——って、なんで俺が語ってんだ！？」

「……ハァー」

「お前今、溜息ついたか？すごい面倒くさそうな顔で溜息ついたよな？」

「王様……では、明日こそ起承転結のあるお話を致します」

「また無視かよ……まあ、次こそちゃんとすると約束するなら今日ももういいぞ」

「……かしこまりました。それではお休みなさいませ」

「ああ……」

ある日、森の中でお嬢さんが熊さんに出会いました。
お嬢さんは慌てて逃げましたが、熊さんは追いかけてきます。
熊さんはお嬢さんが落としたイヤリングを届ける為に追いかけていたのです。
そして、みんなで踊りました。

めでたし、めでたし。

* * *

「歌ったんじゃないのか……」
「なんですか？」
「いや、もう何をどう突っ込めばいいんだ？」
「ちゃんと起承転結だったじゃないですか」
「ああ、そうだったな。……もういい、疲れた。寝る」
「……かしこまりました。それではお休みなさいませ」
「ああ……明日もよろしくな」
「……はい」

とある国に、とても優しい王様がいました。

優しい王様にはとても綺麗なお妃様がいましたが、政略結婚で結ばれた二人は友情を育む事ができても、男女の愛情を育む事はありませんでした。

そのうちに、お妃様は一人の騎士と恋に落ちてしまいます。

それを知った王様はお妃様と騎士に十分なお金を渡して王宮から逃がしてやりました。そして王様は、追手がつかないようにお妃様を殺したと臣下の者達に伝えたのです。

臣下たちは恐れ慄きながらも、お世継ぎの為に新しいお妃様を迎える事を望み、そして新しいお妃様が王様の許へ嫁ぐ事になりました。

しかし、そのお妃様には他に好きな人がいたのです。

その事を打ち明けられた王様は、お妃様を同じ様に逃がしてやる事にしました。

それから王様は考えました。

この際、意に添わぬ結婚を押し付けられようとしている娘達を同じ様に逃してやればいいのかと。

お姫様から聞いた情報を元に、王様は同じ様な境遇の貴族の娘を次々と召し上げました。

当然、真相を知らない臣下や、街の人達は残虐王と陰で呼ぶようになりましたが、王様は気にも留めませんでした。

ただ貴族の娘達の間でのみ真実は広まっていたましたが、それを口にする事は出来ません。

やがて、王様が知る限りでは意に添わぬ結婚を強いられている娘もいなくなり、王様は一人で夜を過ごすようになりました。

王様に新しい縁談が来る事も最早ありません。

しかし、お世継ぎの事を考えればお妃様が必要です。臣下たちは頭を悩ませながら、新たなお妃様を誰にするか相談しました。

そこで白羽の矢が立ったのが宰相の娘でした。

宰相の娘は容姿も麗しく、頭も良い。これなら王様も気に入ってくれるのではないかと、一縷の望みをかけて。

そうして、宰相の娘は一夜にして殺される事もなく、無事に千夜を迎える事ができました――

* * *

「……千夜過ごしてやっとまともな話をしたかと思ったら自慢か？自分の事をよくそこまで褒められるな」

「ええ、事実ですから」

「で、明日には無事に帰って『めでたし、めでたし』という訳だ」

「それはどうでしょうか？まだお世継ぎの問題が残っていますからですが、王様は最初におっしゃいましたよね？『他に好きな男がいるのなら今すぐ逃がしてやる。そうでなければ、俺と千の夜を過ごせ。そして、俺を退屈させる事がなかったら無事に帰してやる』と」

「……確かに今日で千夜だが、まだ夜は終わってないし、俺は退屈している」

「今のお話は退屈でした？」

「よく知っている話だからな」

「そうですか。じゃあ、王様の知らないもう一つのお話を」

「へえ？」

「王様の許に嫁ぐ事が決まった宰相の娘はとても喜びました。なぜなら、娘はずっと王様の事が好きだったからです」

「—— おい、何言って……」

「娘は幼い頃に父親に連れられて王宮に行った時に会った王子様の事がずっと好きでした。でも年齢が離れていた為にお妃候補には入れてもらえず、王子様が王様への即位と同時にご結婚された時にはショックのあまり部屋に一カ月以上閉じ籠って家族を心配させた程でした」

「—— ちょっと待って」

「それから数年が過ぎたある日、娘は王様がお妃様を殺したとの話を聞きました。しかし、娘にはその話がどうしても信じられず、宰相である父親に真相を徹底究明するべきだと詰め寄りましたが、父親は首を振るばかりでした。そして、次に王様が新しいお妃様を迎えたと聞いた時には怒りのあまり、父親のカツラを全て燃やしてしまいました」

「—— 宰相の突然のカミングアウトはそう言うことか……」

「それから王様が召し上げた娘を次々と殺しているという話を聞いても信じられず、父親に自分を差し出せと何度も言いましたが、聞き入れてもらえませんでした。そこで、娘は抗議の家出を決定しました」

「—— それで宰相の抜け毛が益々酷くなったのか……」

「娘は友達の家にはばらく身を寄せていたのですが、そこで事の真相を知ります。それで、王様の邪魔をしてはいけないと思い、すぐ

にでも王宮に乗り込んで王様を押し倒したい気持ちをぐつと堪えて実家に戻る事にしました。そして、近いうちにきつと王様は一人になると、今度こそ王様を逃がすものかと、虎視眈眈と狙っていました」

「——怖いな……」

「そうしてやつと巡つて来たチャンス。娘は気合を入れた勝負下着で準備万端だったのに、王様は『他に好きな男がいるのなら今すぐ逃がしてやる。そうでなければ、云々』^{うんぬん}と言って、その夜は何もしませんでした。そしてそれから何もいません」

「——いや、それは……」

「娘は考えました。では、退屈させれば実家に帰される事はないのかと、王様の傍にいられるのかと。王様が『お前の話は退屈だから、これ以上は聞きたくない。もっと別の楽しい事をしよう。ゲヘヘ』と押し倒してくれる事を夢見て、適当な話をしていたのですが、それも叶いません」

「——どんなスケベ親父だ、俺は」

「そしていよいよ、娘が恐れていた千夜を迎えてしまいました。このまま明日になったら実家に帰されてしまうのか、どうしたら王様と一緒に千一夜を迎えられるのか、どうしたら娘にとって『めでたし、めでたし』になるのか——」

「もういい！」

「王様……」

「いや……その……」

「なんですか？」

「あー、うん。——『お前の話は退屈だから、これ以上は聞きたくない。もっと別の楽しい事をしよう。ゲヘヘ』」

「……棒読みですね」

「そこは見逃せよ」

「仕方ないですね」

「なんでお前はいつもそんなに偉そうなんだ？でもまあ……じゃあ、今から押し倒していいんだな？」

「はい、喜んで！」

「居酒屋か？……それにしても、ずいぶん時間を無駄にしてみましたな」

「全くです。でも待たされた分、きっとすごいんだろうなと期待しております」

「なぜプレッシャーをかける……」

「まあ、千夜も待てる程の愛情が私にはあるので大丈夫です。二人で頑張りましょう。ついでにお世継ぎ問題についても頑張りましょう」

「ついでなのか……」

「はい。私にとっては今この瞬間の結末が……」

——めでたし、めでたし。

妄想部的*千一夜物語*（後書き）

というわけで、妄想部 本日更新8月企画「童話」よろしくお願
致します。

[http://mypage.syosetu.com/144
526/](http://mypage.syosetu.com/144526/)

これでいいのだ <恋愛・現代>

「なあ、たまには出ようぜ？」

と、中学時代からの友達の渡辺に、しつこく誘われて出席する事にした高校の同窓会。

卒業以来、何度かやってたみたいだが、俺が今まで出席する事はなかった。

なぜなら肩身が狭いから。

で、案の定、会場に入って五分で後悔した。

帰りてえ。

何の目的もないまま何となく受かった大学に、何となく通ったものの、何となく合わずに中退してから、俺はフリーター街道をまっしぐらに進んで行った。

そして三十歳を目前に控え、未だにフリーターをやっている訳なんだが……。

「フリーターっていうか、それニートじゃないのか？ 結局は親の脛かじってるだけだろ。男としてそれってどうよ？ 情けないか思わない訳？」

目の前で俺に向かって偉そうに講釈垂れてんのは高校時代に何かと俺に突っかかって来ていた沖野だ。

何なんだ？ 俺が何したってんだ？

昔から何度か考えてみた事だが、やっぱりわからねえ。

生徒会長だった沖野は有名私大に推薦で入学して、有名企業に就職して、立派な人生コースを歩んでいるようだ。

へえへえ、羨ましい事で。

もういい加減うんざりしてきた俺はこれ見よがしに耳をほじりだしたんだが、沖野には通じない。

空気読めよ。

この際、鼻もほじるか……と、思った所で、沖野の注意が逸れた。助かった。

「藤原！」

沖野の張り上げた声に、俺は思わずドキッとしてしまった。

別に沖野のバカでかい声のせいではなく、呼んだ名前に反応してしまっただけだ。

「ああ、沖野君……」

後ろから近づいてくる声は、あの頃と変わりなく透き通って凜としている。

恐る恐る振り向いた俺の前に立っていたのは、藤原真奈——高校時代に密かに好きだった相手だ。

「あれ？……相田君？」

少し首を傾げて笑う藤原さんは相変わらず美人だ。
眩しいな、くそ。

「聞いてくれよ、藤原。こいつさ、自称フリーターなんだぜ？」

いつからお前に「こいつ」呼ばわりされるようになったんだ、俺は。

そっぴゃ、沖野って高2の時、藤原さんに告白して振られたんだっけな？

それを思い出したら、なんだか苛立ちも少し治まった。

「へえ〜。フリーターってどんな事してるの？」

そこ、食いつくか？ できれば流して欲しかった。
へらつと笑って答えるしかない俺の情けない思いを察してくれ。

「今は……スーパーで商品補充のバイトしてる」

「へえ〜。毎日どれくらい働いてるの？」

もう勘弁してくれ。

隣でニヤニヤしている沖野に無性に腹が立つ。

だけど、美人には逆らえないつつか、なんつつか……。適当な事言つて、この場から逃げ出せばいいのに、何となく名残惜しくて離れられない。

俺も馬鹿だよな。

「いや、毎日働いている訳じゃなくて……月半分くらいかな？」

「えー？ じゃあ……働いてない日は何してるの？」

そこまで驚かなくても。

「本読んだり……ネットしたりかな？」

「ネットかあ……。私、あんまりネットってしないからよくわからないんだけど。パソコンも実は苦手で、仕事で使うメールや、エクセルとパワーポイントだけで精一杯っていうか……」

いや、そこでなぜ恥ずかしそうにする？ 恥ずかしがるのはダメ人間な俺の方だろ？

って、わかっていても、沖野に言われるとやっぱり腹が立つ。すげえムカつく。

「三十にもなるのにネットばかりってどうかと思うぜ？ それに比べて藤原はすごいって。確か、外資系の会社で今はプロジェクトマネージャーやってるんだよな？」

「え？……ああ、うん。本社はオランダなんだけど、日本相手の取引が多いから。でもエンジニアの人達ってマイペースな人が多くて調整にいつも困ってる」

「ああ、わかる。あっちの人達って、納期迫ってんのになんて平気で長期休暇取ったりするよな？」

「そうそう……」

俺、やっぱり完全にこの場にいらねえよな？

くそ！ 渡辺はどこへ消えたんだ？ 誘って置いて放置とか有り得ねえ。

「ああと……俺、渡辺さがして来るわ……」

そう言っつて、なんとかその場から消えようとしたはずだったのに

—。

* * *

「へえ、相田君の部屋って離れになってるんだねえ？」

「ああ、出入りは母屋からじゃないと出来ないんだけどな」

「って、なんで藤原さんが俺の家に来てんだ？ 何でこうなった？」

「あ！ エロ本、はっけん！」

「いやいやいやー！」

「エロ本つつつか、エロゲ雑誌つつつか……何で、こんなところに置いてんだ、俺！」

慌てて彼女から取り上げて背中に隠したが、この部屋に入れた時点で手遅れな事はわかっていいる。本棚にだっていくらでも似たような物が並んでいるからな。

だが藤原さんは気にした様子もなく、部屋の中を興味深そうに見てからP Cの前に置いていた雑誌に目を止めた。

「あ、これが言ってた……ボーカロイド？ この子可愛いけど、なんでネギ持ってるの？」

「いや、それはその子の好物で……」

「へえ。好物とかあるんだ？ 面白いねえ」

「公式じゃないんだけどな……」

「ええ？」

あれから、なぜかボカロの話になって詳しく知りたいっていう彼女に、からかっているのかと疑いつつも説明したのだが、どうやら彼女は本気で興味があったらしい。

それで家に来る事になったんだ、そうだ。

しかも、彼女の「へえ〜」って言葉も最初は馬鹿にしてるのかと思っていたが、どうも本気で驚いていると言うか、感心していると言うかなんていうか……。

「ところで相田君ってさ、今彼女いるの？」

「は？」

何だ？ いきなりのこの話題転換は？

「いや……いないけど。っていうか、今までいた事ないつつうか……」

って、何で俺は余計な事までカミングアウトしてんだ！？ なんか……あれ？

「そうなんだ？ へえ〜」

そこは感心するところじゃないよな？ というか、忘れてくれ！！ それなのに、彼女は更に俺を追い詰める。

「じゃあさ、風俗は行った事ある？」

「ええ！？……いや……その……残念ながら、今まで機会がなくて……」

正直に言えば、興味はあれども度胸がなくて行けないんですが。もういい加減、この拷問から解放してくれないかな？ 沖野にこいつ呼ばわりされた時より居心地悪いつつつか……って、ここ俺んちだから逃げられないし、どうすりゃいいんだ？

待てよ？ これってひょっとしてチャンス？ やっぱチャンスなんだろうか……だが残念なことに俺にはやはり度胸がないわけで……そもそも、離れとはいえ、母屋では両親が寝てるわけで……。それに藤原さんは酔ってるんだ。そこに付け込むのは男として……有りか？

「私……高校の時、相田君の事好きだったんだよね」

「……は？」

今聞こえたのは空耳？

じゃないなら、なんで俺？ 顔も頭も良くなって、藤原さんや沖野と違ってクラスの中でも埋もれていたタイプなのに。

それになぜ今更このタイミングで告白なんだよ！？ 高校の時に言ってくれれば……ああ、あの時の俺にこの事教えてやりたい！！

「いつも、休み時間でもずっと本読んでたから……邪魔したら悪いかな？ と思つて話しかける機会がなくて。でも渡辺君とかとは楽しそうに話してて……何話してるのかな？ 私も入りたいなあって思ってた」

いや、ゲームとか、ラノベとかのバカな話ばかりだったんだけど。まさか、そんな風に思われてたなんて……ん？ 待てよ？ じやあ……。

「ひょっとして、藤原さんって沖野に告白された時に好きな奴の事とか聞かれた？」

「え？……ああ、うん。あれ？ 何で沖野君に告白された事知ってるの？」

「……けっこう有名な話だよ？」

「ええ！？」

驚いて目を丸くしている藤原さんが可愛くて、思わず抱き寄せたくなったんだけど……やっぱ酔ってる相手に手を出したらまずいよな？ いや、決してビビってる訳じゃなくて……嘘です。本気でビビってます。

それにしても、そうか……沖野がやたら絡んで来るようになったのも……。

ぼんやりと当時の事を思い出していたら、急に藤原さんが正座のままズツと寄って来て、膝詰めで説教が始まった。

「あのですね……今日は相田君が来るって聞いてすごく楽しみにしてたのです」

「はあ……」

「それが会ってみたら……カッコよくなってるかな？ なんて期待した私が馬鹿でした。まさかもうすぐ三十歳にもなろうと言っのに、

フリーター。まあ、それはいいんだけど、未だに親御さんの脛かじってるのはいかがでしょうか」

「……すみません」

藤原さんって酔うと説教するタイプだったのか。にしてもどうすりゃいいんだ？

そう悩んでいたら……。

「と言う訳で、責任とって下さい！」

「は？」

「私の傷付いた心を慰めるべきです！」

「あの……どうやって？」

あれ？　なんか方向が変わってないか？
そもそも、なんで俺が責任取らなきゃいけないんだ？　とは言えない自分が情けないのだが。

「相田君から魔法使いになる権利をはく奪します！！」

「……ごめんなさい。意味がわかりません」

「ふふん」

「いやいやいや……」

「相田君は二次元しか興味ない？」

「いや、そうじゃなくて……」

完全に藤原さんは酔ってるから……この場合、俺は紳士的に……
そんなもんどうやったらなれるんだ？
って、うお！？ やべえって――。

* * *

と言う訳で、まさかの朝チュンです。

彼女は早朝にもかかわらず、キツチリ支度を整えて俺の部屋のくすんだ鏡で化粧をしながらぼやいている。

「あー、やっぱりメイク落とさず寝たからお肌が最悪な事になってる……」

「十分綺麗です」とは思っても言えない俺でして。

そもそも場数のない俺にはこの状況をどうすればいいか分からずに茫然とするしかないんだが……こんなものなのか？ いや、もちろんすげえ気持ち良かったわけなんですが……あ、やべ、思い出したらいかん。ダメだ、落ち着け自分。

「さてと……あのね、相田君。私、昨日はちょっと酔っ払いすぎました。迷惑掛けてごめんなさい。でも……うん。じゃあ、着替えないと出勤できないんで、もう帰ります。お邪魔しました」

「え？ あ、ああ……」

ペコリと頭を下げ、立ち上がった彼女に続いて俺も慌てて立ち上がる。

そうか、今日は月曜日だった。てことは、俺もバイトの日だ。

「げ、玄関まで送るよ」

「ん？ ありがとう」

微笑んだ彼女はやっぱり綺麗で……ああ、この場合は駅まで送るべきだったか？ いや、家まで？ さっぱりわからん。

——って、ちょっと待った！！ まさか、この音は……？

「え……？」

「えつと……」

母屋に入った途端、母との遭遇。

最悪だ。

そんな親子の間に流れる気まずい空気を叩き切ったのは彼女でした。

「おはようございます。私、藤原真奈と申します。ご挨拶もせずにお宅に上がり込んでしまい申し訳ありませんでした。大変、失礼な事とは存じておりますが、今は急いでおりますのでまた改めてご挨拶に伺わせて下さい」

「あ、……え、ええ。はい」

母さんは明らかに動揺している。
当然だ。

俺も心臓が飛び出すんじゃないかと言っくらいにバクバクしているのに、何で彼女はこんなにも落ち着いているんだ？

そうして無事に……って事もないが、彼女を見送った俺は朝食の席で気まずい思いをしながら黙々とご飯を食べて、バイトに出掛けた。

* * *

「おかえりなさい」

「……ただいま」

って、なんで藤原さんが俺ん家のリビングにいるんだ？ 何でこ
うなった？

今朝、帰った時とは違う服でソファに腰掛けた彼女はいかにもキ
ヤリアウーマンって感じに見える。

改めて挨拶に来るって本気だったのか……。

「仕事……定時に終わらせれたんだ？」

俺が帰って来た事にホッとしたらしく、母さんはそそくさとリビ
ングから出て行った。

それで二人きりになってしまった俺は何を言えいいのか分から
ず、結局どうでもいい事を口にした。

「ん？ 定時って言うか、うちはフレックスだから。いつもは本社
との時差の関係でまだまだ仕事してる時間なんだけど、やっぱりこ

ういう事は早くきちんとしたいから」

「そうなんだ……」

別にわざわざ改めて挨拶なんて良かったのにな、なんて思っている俺にまた彼女は突然の質問をした。

「ねえ、相田君って子供好き？」

「は？」

「嫌い？」

「いや……どちらかと言うと好きかな？ 甥っ子、姪っ子見てても可愛いし……」

姉二人の子共達を思い浮かべれば自然と頬が緩む。
だが、何なんだ？ この質問の意図がわかんねえ。

「私も好きなんだ、子供」

「そうなんだ……」

「でも、今の仕事もすごく好きなんだ」

「そうなんだ……」

もう何て答えればいいのかさっぱりだ。

「私ね、子供はすごく欲しいんだけど、今の仕事は海外出張も多く

て、子育てしながらは難しいと思うの。それで、子育てしてくれる事を条件にお見合いもしてみたんだけど、中々いい人に出会えなくて。やっぱり結婚は好きな人になりたいよね？」

「ああ、それはそうだよなあ……」

「だから相田君、私と結婚してくれないかな？」

「は？」

「ダメかな？」

「いやいやいや、ちょっと待って!! あのだ——」

「待つ必要なんてないでしょ! ? こんなに素敵なお嬢さん相手に!!」

「母さん! ?」

突然の逆プロポーズにうろたえる俺だったが、更にいきなり乱入して来た母さんに驚愕した。

「って、今まで聞き耳立ててたのかよ! ?」

「私もお父さんも、死んでもお葬式してもらえず、押入れで白骨化するなんて嫌よ! ?」

「二人の年金食い潰す気はねえよ! !」

今まで、そんな風に俺の事見てたのか……まあ、月に五万しか入れない俺が偉そうに否定できるものでもないんだが。

「相田君に久しぶりに会って、ガツカリもしたけど、やっぱり好きだなんて思ったの。相田君の子供なら産みたいって程に。私、家族を養っていけるくらいは十分稼いでるから、相田君が主夫してくれたらすごく理想的だなんて」

相変わらず動じることなく落ち着いて微笑む藤原さんはやっぱり美人で……。だが、このおいしい申し出に飛び付くのは男としてどうかと……。情けなくないか？

「その……いきなり子供産みたいって言われても……」

答えを言い淀む俺を、母さんは鬼の形相で睨みつける。

「女にとって、その相手の子供を産みたいと思うかどうかはとても重要な事なの！？ あなたみたいに情けない男相手にここまで言うてくれて、何を迷う事があるの!？」

いや、だから情けない事はわかっていたけど、母親にこうもハッキリ面と向かって言われるときついな。

「私、昨年買ったマンションがあるけど、もし相田君がご実家から離れたくないなら同居でも構わないよ？」

いやいや、どこの箱入り息子だ、俺は。

側では母さんが期待した目で俺を見てるし、こんな旨い話を断るのは馬鹿だろうか？ うん、馬鹿だよな？

情けないとか、今更だし、何より俺もやっぱ藤原さんの事が好きみたいだ。

何もかもが逆になってしまっているけど……愛があればいいよな？

頷いた俺を見て、彼女はホツとしたように笑った。

ああ、なんだ。やっぱり藤原さんも本当は不安だったのか。

そう思うと、情けない俺だけど、絶対この先彼女を守っていこうと心の中で密かに誓った。……金銭面以外で。

それから驚くほどの速さで俺達は結婚した。

結婚式には沖野も招待したのだが、その時には嫌味も笑って聞き流せるようになっていた。

俺に甲斐性はないけど、愛だけはたくさんあるから。

彼女と過ごせば過ごす程に限りなく生まれる愛に、世間から何と言われようと自信をもって言える。

俺達はこれでいいんだよ!!

実験室の二人 【前編】 <恋愛・現代> (前書き)

勢いで書いたものですので、色々とスルーして下さいば嬉しいです。

実験室の二人 【前編】 <恋愛・現代>

オランダにある本社への二週間の出張を終えて、今朝早くにやつと日本に着いたばかりだと言うのに、俺が家にも寄らず出社したのには訳がある。

九月八日が期限の電子回路基板の部品が六日の夕方まで納品されないという恐ろしい事態に陥った為、七日午前九時現在の今から急いで実装しないといけないのだ。

もう二度とあの業者は使わねえ。
そう心に誓って、疲れた体に鞭打ってロジに届いた部品を受け取り実験室に来たのはいいのだが……。

「——ない！ 俺のループがない！！」

出張に行く前に片付けといた実験機の上や引き出しの中を漁っても見つからない。

俺と十年以上も苦楽を共にした拡大鏡^{ループ}が行方不明なのだ。
いや、ちよつと大げさだけど。

「俺のループはどこへ行つた！？」

とにかく、あれがないと明日までの基板二十枚ができねえ。いちいち誰かに借りるのも面倒だし……って、待てよ？

「なあ、秋山。お前、俺のループ知らないよな？」

実験機が隣にある後輩エンジニアの秋山真帆にまさかとは思いつつ、俺は尋ねた。

フレックスのこの会社はコアタイムが十時～十五時で朝礼は十時からになるので、普段の俺はだいたい九時半に出勤してその日の予定とメールをチェックし、朝礼を終わらせてから実験室に籠る。

籠ると言っても、俺の所属する課全体の実験室なんで広い。

他のエンジニアもそんな感じで遅めの出社なのだが、秋山だけはいつも早く出勤して早く帰るので、午前九時過ぎのこの時間にはいつもいる。

そして、まさかと思った俺の勘は残念ながら当たった。

「おっと、ごめん。借りてました。はい」

「おお、そうか。良かった、見つかって……ってなるか!!」

「何？ 幸田さん、朝からうるさい」

「うるさいじゃねえよ。お前、さっきから俺がループ探してたの分かってたろうが！ そもそも、勝手に人のもん使っというて元の場所に返さないとかってねえだろう!？」

「ああ……幸田さん、ループ借りました。はい、返しました。ありがとうございました。おしまい」

「信じられねえ……この女、サイアク」

「よく言われます。幸田さんに」

「……」

開き直りやがった。

一年前の部署移動でやって来たこいつが隣になってからは苛々さ

せられっぱなしだ。

それまでは割と美人でさっぱりした性格に見えたから少しはいいなと思っていたが、とんでもなかった。

まあ、そんな無駄な事考えてないでテスト用の基板実装に取りかかるう。枚数は大した事ないが、0402サイズの抵抗器とコンデンサが所狭しとたくさん並ぶんだよ。誰だよ、こんなの設計したやつは。……俺だよ。

「……ない」

基板とチビツコ部品達、それに半田と半田ごても用意して準備万端。さあ、やるぞって所で気付いた。アレがない。

「……なあ、秋山。俺のセラピン知らないか？」

「……ん？」

「お・れ・の、セラミック・ピンセット！」

「……ん」

秋山が俺と目を合わせないようにして、ゆっくりと差し出したのは俺の……セラミックピンセット……。

「って、先が折れてるじゃねえか！！ お前か！？ お前が折ったのか！？」

「……ごめんなさい。金曜日に借りて、月曜日に折れました」

「折れました、じゃねえよ！！　だから、お前も早く備品購入リクエストしろ
って言ったんだろうが！！」

「あ、昨日ちゃんとリクエストしたよ。幸田さんの分も」

「当たり前だ！！　って、昨日のリクエストだったら早くても届く
のは来週じゃねえか！！　俺は今日、明日でこの基板二十枚作んな
きゃいけないんだよ！！　正確には明日の夕方までの便に乗せなき
や海外工場むこうでサンプルテストができえんだよ！！」

「……じゃあ、直接お届けするとか？」

「アホか！！　間に合うようにお前が手伝え！！」

「無理だつて！！　その図面この前ちよつと見たけど、それ作るの
職人技だよな？　私がしたらガツガタの部品浮きまくりになるつ
て！！」

「それでも手伝え」

「私にも私の仕事がありました」

「残業代はちゃんと出る」

「今夜は友達と約束がありました」

「次回、乞うご期待」

「無理！　この前のコミケの戦利品を届けてくれるんだから！　次

にお互いの都合つく日がわかんないから平日の今日なのに!」

「我慢しろ、おたく。お前は腐っても、それは腐るもんじゃねえだろうが。今、図面送ったからチェックしろ。0402のとは飛ばしていいから他をやれ」

「メール受信拒否!」

「すんなボケ! さつさとやれ、おたく!」

「おたく、おたく、うるさい! 幸田さんだっておたくじゃん!」

「俺はアニメキャラのマグカップなんて使わねえ」

「私は入社面接で志望動機に『ガ。ダムが作りたいからです』なんて言わない」

「受かったって事は、その志を受け入れてくれたって事だよ、この会社が」

「どう考えても無理でしょ、この会社じゃ方向性が違うもん。重工を目指すべきだったよ」

「バカか、全てのパーツが一つの会社で出来ると思っな」

「……じゃあ、この会社でどのパーツを作るつもりなの?」

「それは極秘事項だ」

「はい、消えた」

「消えるか！ 支社長だつて『是非、頑張りましょう』って言うてくれたんだよ！」

「……たまにステイプとこそこそ話してるとこ見かけるけど……まさか、ガ。ダムについて語ってるとか……英語で」

「俺はガ。ダムの事ならフランス語でも語れる！」

「うわー、カツコよくなーい」

「うつせえ！ いいからさつさと半田ごて用意して——」

「幸田さん、今日は十時からプロジェクトミーティングだけど覚えてる？ もうすぐだよ？」

「え？ あっ！——」

扉を少しだけ開けて室内に顔を覗かしたPMの藤原さんが声をかけてくれて、今日がミーティングの日だったと言つ事をようやく思い出した。

やべ、すっかり忘れてた。出社しててよかった。

「ありがとう、すぐ行く！」

「はい、それじゃ後で」

やっぱり藤原さんはいいな。俺の癒しだよ。

美人だけどそれを鼻にかけてないし、男にも媚びない。だからと言って男を馬鹿にしてるわけでもない。仕事でもちゃんと俺達エンジニアを立てながら、それでもしっかり主導権は握っている。日程

調整や関係会社との調整まで細やかにしてくれて……いいよなあ。
なんて思いながら急いでノーパーソと筆記用具を準備する。

「……幸田さん」

「なんだよ？」

急に暗い声で秋山が俺を呼ぶからなんかビビる。

まさか、ステンレス製のピンセットまで折ったなんて言うんじゃないだろうな。

「ドンマイ！」

「……は？」

「酸いも甘いもあってこそ人生！」

「秋山……お前、今度はTOEICより日本語検定受ける。その為の勉強しろ。あと、^{マネージャー}課長に俺はミーティングだから朝礼はパスだつて言つといてくれ」

そう言い残して俺は実験室を出た。
が――。

なるほど。そう言うことか。

秋山の言いたかった事はミーティングの後にわかった。

大した問題もなく、進捗状況の確認だけだったミーティングは思ったよりも早く終わり、解散後に藤原さんから結婚式二次会の招待状を渡されたのだ。

他のみんなには俺が出張中の間に知らせてあつたらしい。

失恋した俺を慰めてたつもりか、あいつは。

まあ、失恋つて程じゃないけど、ちよつとショックだな、やっぱ。だがそれ以上に、あいつに氣を使われたのが……いや、それよりも懂れめいたものを抱いていた事に氣付かれていたのがなんだか居心地悪くて、実験室に戻る足取りが重くなる。

「本宮さん、いいじゃないですか、貸して下さいよ」

「だってさあ、秋山ちゃんにセラピン貸したら折られるからなあ。幸田君の折つて通算何本目だよ？」

「ええ？……数えてませんよ、そんなの。でも今回は私が使うんじゃない、幸田さんに貸して欲しいんです」

「ああ、そう言う事ね。なら、どうぞ」

「ちよつ！……ありがとうございます。ですけど！　あまりに酷すぎません！？」

実験室に戻つて、扉に手をかけた所で聞こえて来た話し声。

ああ、そういや、本宮さんはベンチマーク取つてんだったか。じやあ、セラピンは必要ないだろうけど、それなら俺、自分で借りるし。

なんだ？　なんか、もやもやするな。やっぱ、時差ぼけか。飛行機の中では割と寝れたんだけど、やっぱウーロン茶飲もう。

自販機に向かおうとして抱えた荷物に氣付き、結局それらを置くために実験室に入る。

「あ！ 幸田さん、セラピンゲットしましたよ！」

「いや、秋山ちゃん、それ俺のだからね。ゲットしてないからね、貸したんだから」

「本宮さん、ありがとうございます。助かります」

「いいよ、幸田君なら安心だから」

「さつきから本宮さん酷いですよ！ 私を何だと思ってるんですかね？」

「——クラッシャーだろ？」

秋山の拗ねた問いかけには俺と本宮さんだけでなく、実験室にいた全員が声を合わせて答えた。

クラッシャー秋山は有名だ。

以前、電子顕微鏡を壊した時には全米が泣いた。いや、設計部全員が泣いた。

もちろんあれは秋山のせいではなく、たまたまと分かっている。分かっているが……うん。修理代は部の予算ではきつく、経理に泣きつく羽目になり、修理期間中は別棟の他部署に借りに行かなければならず苦勞したんだよ。

そんなこんなでもう夕方だ。

たかがピンセット。されどピンセット。

こんな単純な物でも、持ち主のクセが付くので意外と人の物は使

いにくかったりする。それでもステンレス製のピンセットにまとわりつく極小部品に苛々しなくてすむので順調に実装は進んでいた。自分の仕事の合間にとかいながら、なんだかんだで基板の方を優先させて手伝ってくれる秋山の手も、猫よりはかなりマシだ。いや、正直に言えば……。

「——秋山、友達との約束は何時にどこだ？」

「……駅前のスタバに七時だけど？ こ、これから断りのメールを——」

「いい。お前が手伝ってくれたおかげで、予定以上に早く終わりそうだからもういいぞ。ありがとうな」

「え？ それはダメだつて。ちゃんと最後まで手伝うよ」

「……じゃあ、六時まで手伝ってくれ」

「六時半までは大丈夫だよ」

「いいよ。最近は暗くなるのも早いからあんまり遅くならない方がいい。駅までの道は人通りが多いとはいえ、この前も変な奴が出たらしいし気をつけた方がいいからな。一応お前も女だし……認めたくないが」

「一応じゃなくてちゃんと女だから！ いつかはつきり認めさせてやるんだから！」

「おお、楽しみに待ってるわ」

怒りながらも秋山の手は動いている。

結局、こいつはがさつで人の物を勝手に使うが（そして壊すが）、きっちり仕事はこなすし、女であることには甘えない。だから嫌いではない。

だがしかし――。

「お前……それだけ小さいコンデンサをどうやってら割る事が出来るんだよ。逆にすげえよ……」

「ちがっ！ 半田が上手くいかなかったからやり直そうと思ったらピンセットが刺さったんだって！」

「だから、普通は刺さらねえって！」

秋山といると退屈はしないが頭が痛くなる。

それでもまあ、今日は泊まりも覚悟してたけど無事に家に帰れそうだし、セラピンの恨みは忘れてやる事にした。

だからどうか、明日は平穩に過ごせますように、と祈りながら。

「……まさかのフリーター……」

「うん、まさかだったね……」

俺は今、藤原さんの結婚式二次会に出席している。

正確には相田さんになった訳だが、仕事ではそのまま旧姓で通すらしい。

やっぱり花嫁姿の藤原さんはすごく綺麗だ。

にしても、新郎がなんであれなんだ？

いや、決して見た目が悪いわけではない。だが、いいわけでもない。

高校時代の同級生と同窓会で再会して結婚——なんて話を聞いた時には、藤原さんの相手だからきつとイケメンエリートなんだろうって勝手に思っていたのだが。

それは秋山や他の同僚達も同じだったようで、新郎の紹介ではなんとなくぼかしていた職業を沖野と言う二人の高校時代の同級生が明かした事によって、みんな驚いていた。

でも、この沖野って奴はなんとなく気に食わない。

「——新居は藤原さんが去年買ったマンションなんだって」

「ああ、あのキャッシュで買ったやつか……」

「男前だよねえ、藤原さんって」

「だなあ……。俺はでかい買い物は恐くて出来ねえ」

「年棒制の高給取りが何を言うかな。マンションの一つや二つや三つくらい簡単に買えるでしょ？」

「簡単に買えるか、ボケ！」

「えー？ Sランクのチーフエンジニアがそんなこと言っても嫌味にしか聞こえませーん。日本支社じゃ幸田さんだけじゃん、Sランク。チクシヨー！」

「チクシヨーってお前な……」

「よし！ 今日は飲むぞ！！ とりあえず新郎新婦に突撃インタビューだ！！」

「おい、秋山！」

今日はつていうか、もう出来上がってるじゃねえか。そういやこいつ酒に弱かったな。

だが、俺を巻き込むなよ。俺の腕に絡めた腕を離せ。なんか柔らかいのが当たる。

結局、逃げられなかった俺は藤原さんとだけじゃなく、新郎の……相田君とそこから意外と話が盛り上がった。

正直に言っと、かなり盛り上がった。

まさか、この世代で初代ガ。ダムやエル。イム、マ。ロスの話が出来るなんて。いや、マ。ロスは俺的にプラスが一番好きなんだけど、相田君も同じとは。しかもそう！ FSSは外せないんだよ！
なんて話していたら藤原さんが嬉しそうに相田君を見ている事に

気付いて、ああ、やっぱり好きなんだなあって感じた。いいな、そういうの。

この先は相田君がフリーター……じゃなく、パートをしながら主夫をするらしい。

沖田っていう奴のように、とやかく言う奴も多いだろうけど俺は応援したいと思った。

そもそも、藤原さんに結婚や出産で退職されるとかなり困る。変な意味合いじゃなく、優秀なPMの藤原さんに抜けられるとエンジニアとして開発に専念出来なくなるからだ。

なんとなくいい気分になった俺は、そこから更に酒が進んでしまった。

そして――。

朝チユンだ。

いや、違う。お互いにまだ最後の砦は残っている。

ここは……俺んちか。

なんで秋山が俺のベッドに下着姿で寝ているのかは覚えてないが、とりあえずシャワーを浴びてスッキリしよう。それから、考えよう。

「げっ！――やつちゃった!？」

ベッドからそっと抜け出そうとしたら、後ろから秋山の悲鳴じみた声が上がった。

「やってねえ」

「そっか……そうだよ。よかった。……って、なんでやらない

の!？」

「お前……日本語勉強しろって言うてるだろうが。矛盾してんぞ？」

「だって、こんなにおいしそうな据え膳があるのに。少しは手をつけるのが礼儀じゃない？」

「意味わかんねえよ!! たった今、何もなくて良かったって言うてたじゃねえか!!」

「記憶ないのにやっちゃうのが嫌だったの!! 今はあるからいいの!!」

「記憶があるからって良い訳あるか、ボケ!!」

「じゃあ、やらないの？」

「だからお前……無茶言っになって……」

「私だって恥ずかしくない訳じゃないのに……」

「だったら何で——」

「楽しみに待ってるって言ったくせに……敵前逃亡か!! このスツトコドッコイ!!」

「はああ!？」

スツトコドッコイって何だよ!？ 今時使うか!？
訳わかんねえうちに、秋山は下着姿のままベッドから飛び出して

服抱えてそのまま出て行つた。……出て行つた!?

あ、風呂場に入ったのか。

すぐに服を着て戻つて来た秋山は一言もしゃべらず鞆を持って今度こそ出て行つた。

マジ、意味わかんねえ……。

とにかくシャワー浴びようと起き上がつて風呂場に行つたら、なんか……造花? 秋山が着ていた服に付いてた物が落ちていた。あいつ……日曜の朝からあの服で電車に乗ったら目立つよな。車で送れば良かったか……。

いや、まだ間に合う。

俺は急いで適当な服を着ると、車のキーを持って飛びだした。くそ! 借りてる駐車場遠いんだよ! そう思つて走りだしたら……いた。

「秋山!——つて、逃げるな、ボケ!」

声かけたら走つて逃げるとか有り得ねえ。俺は変質者か! だが、あつちはなんか……とんがった靴。こっちはスニーカーで体格差別にしても勝てない訳がない。すぐに追いついた。

「おまつ……ハア……無駄に走らすなよ……」

くそー、日頃の運動不足が祟つた。

秋山も膝に手を置いて呼吸してるあたり一緒か。

「……わかんない……」

「……は?」

「……駅への道が……わかんない……」

迷子か!!

いや、確かにこちら辺は入り組んでて分かり難いんだけど……半泣き状態で言うなよ。

反則だろ、それ。なんか可愛く見えるじゃねえか。

「……車で送るから」

それからナビに従い車を走らせる間、気まずい沈黙が続いたのだが、たぶんあと少しで到着という所で秋山が外に視線を向けたまま呟いた。

「前に……」

「ん？」

「幸田さんは女っぽい人よりはさっぱりしたタイプが好きらしいって聞いて……でも気がついたら私……がさつな女になってた……失敗した」

「……失敗って——」

「まあ、それが地なんだけど」

「つて、おい!!」

しまった。思わず突っ込んでしまったが、秋山の言ってる事って要するに……。

突然の告白にパニックりそうになる。運転中にそれはやばい。

「秋山、あのな……」

そう言いかけたものの、何を言えいいのかわからなくて結局は言葉に詰まってしまった。

秋山はチラリと俺を見て、また窓の外に視線を戻す。

「せっかく同じ課になれて、実験机も隣になれたのに……幸田さん、私の存在に気付いてないみたいに黙々と仕事してるから……キレました」

「キレるなよ!!」

「だって、三十歳も過ぎて今更どうやって恋愛すればいいのかわからなくて！ 気がついたら小学生並に逆行しちゃったの！ そしてアパートはあれだから、もうそこでいい!!」

秋山の勢いに押されて俺は何も言えないまま、言われた通りに車を止めた。

そして簡素な二階建てアパートを見て驚く。

「……お前、ここに住んでんのか？」

「そうだけど？」

「ここ……女一人で住むには不用心じゃないか？ お前の給料ならもつと良い所に住めるだろ？」

「大学時代から住んでるから。たまに下着を外に干したらなくなるぐらいで、あとは大丈夫」

「大丈夫じゃねえだろうが、それは！」

「もう十年以上住んでる私が大丈夫って言うんだから、大丈夫なの！ 幸田さんには関係ないし！！ バカな事言つて、すみませんでした！ 送ってくれて、ありがとうございました！」

「ちょっ——！」

それだけ言つてさつさと車から降りてしまった秋山に、待てよとは言えなかった。

引き止めて何を言えればいいんだ？

秋山が部屋に入るまで見送つてから家に帰ったけど……なんか、もやもやする。

いつもは心が無になるガ。プラ作りも集中できなくてやめた。

それから逃げるのはやめにして、秋山の事を考える。

あいつはずっと俺にとって職場の後輩で、いつも苛々させられるがなぜか憎めなくて……いや、どちらかと言うと、俺自身楽しんでたか？

しかも、あいつがあんな不用心そうなアパートに住んでるって知つて、すげえ心配になつてる俺は何なんだ？ 関係ないと言われた言葉がこんなにも胸に刺さつてる俺は？

それにしても、なんで急にキレルんだよ。『楽しみに待ってる』
つて……。

「——あつ——！」

ごろりと床に寝転がっていた俺は慌てて起き上がった。
思い出した！！ 確かに言つた！！

けど、ちょっと待て。それでいきなり、あれはないだろう？ 物事には順序って物が……。

そんなもの……いらねえよな。

今頃になってやっと気付いたこの気持ちを抱えて、そんな呑気な事をやるつもりはない。

俺は急いで適当に荷物を詰めると、車のキーを持って飛び出した。

「ここにはインターフォンもないのかよ。お前、せめてチェーン掛けてからドアを開けろよ！」

「いきなり訪ねて来て説教？　っていうか、何の御用ですか？　新聞なら間に合ってます」

「……新聞じゃなくて俺は？　もう間に合わない？」

「何……言ってるの？」

秋山は怪訝そうな顔をしたけれど、俺は構わずに続けた。
分かってる答えなら早く出した方が良い。

「認める」

「……何を？」

「俺の中ではお前が一番の女だって認める」

「ちよっ、ちよっと待って……いきなり……そのセリフはズルいつて……」

驚いたように見開かれた秋山の目に、一気に涙が溢れてこぼれ落ちた。

ずるいのはお前だ。その涙は反則だって。

秋山を思いっきり抱きしめたい衝動を、とにかく俺は必死で抑えた。

「秋山……いくらでも待つが、できたら中に入れてくれないか？
ここはちよつと恥ずかしい」

なんか俺、犬に吠えられてる気がする。その犬を連れたおばさんの視線も感じる。

秋山が泣いているから、不審がられているみたいだ。

そして、入れてもらえた部屋は外観よりも綺麗で、女性らしく片付いた部屋だった。……すごい量のDVDとマンガだが。

「ところで……幸田さん、その荷物は何なの？」

やっと落ち着いたらしい秋山が俺の抱えていた荷物を見て訊いてきた。

「ん？ これは二、三日分の着替えと仕事道具」

「……何でそれを？」

「俺、当分ここから出勤するから」

「何で!？」

「心配だから。絶対ここは不用心だつて。今までは大丈夫でも、これからは分からねえし……なんなら、秋山が俺んち来るか？」

「ちょっと待って！！ それって……急すぎて、ついていけない……」

「そこは頑張つてついて来い。俺達はもうのんびりしてられる年じゃないだろ？」

「ど……どういう事？」

「結婚しよう」

「ええ！？」

「ま、返事は今でなくてもいいよ。楽しみに待ってるわ」

「——信じられない。なんでいきなりそんな結論になるの？」

「結婚は結論じゃなくて過程だよ。この先ずっと秋山と一緒にいたいっていう答えが出たから、それに辿り着くための。というわけでマンション買いに行こう」

「なんでマンション！？」

「俺もお前も趣味の物が多すぎる。本当は家建てた方がいいとは思うけど、セキュリティ面で不安があるからな。俺、出張が多いし、安心していたいんだよ」

半ば呆然とする秋山を連れて、その日のうちにセキュリティのし

つかりしたマンションを購入した。部屋数もマンションにしては多いし、収納もしっかりあるから、まあ上出来だろう。

自分でも驚く程の決断だが、目的があればでかい買い物も意外と出来るもんだ。

それから、藤原さん以上の速さで俺達は結婚したが、会社の皆は誰も驚かなかった。

なんでも、いずれこうなると皆わかってたとか……。

どうやら俺だけが、俺の気持ちを分かってなかったようだ。

ちよつと間抜けだけど、それでも今は秋山と——真帆と過ごす毎日が満ち足りて幸せだから良しとしよう。

「——って、真帆！俺のプリンまで食ったのかよ!？」

「誘惑に負けました。すみませんでした。とってもおいしかったです」

「信じられねえ……この女、サイアク」

「よく言われます。あなたに」

「……」

何も変わってねえ。

でもまあ、今は……二人分食っても大目に見るべきか。

「で、今日の検診どうだった？」

「順調だったよ。……私の体重増加以外は」

「ダメじゃねえか!!」

「明日から頑張ります」

「……」

色々と頭の痛い事は多いが、それでもやっぱり幸せで、あの時出した答えは間違ってたかったと俺は確信している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4228v/>

短編集というか残念集

2011年11月14日19時12分発行